

年頭に期すること

浜口順子

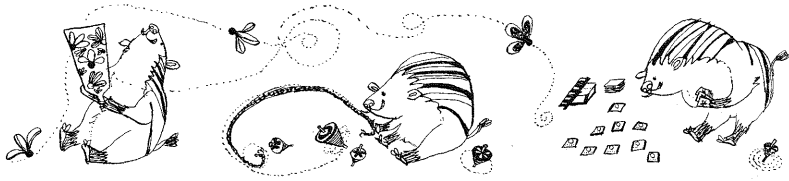
一九〇一（明治三十四）年創刊の本誌『幼児の教育』（創刊時『婦人と子ども』）は、二〇〇七年の今年、第一〇六巻にはいる（一九四五年の休刊をはさむ）。初代編集者東基吉から倉橋惣三編集主幹に至る戦前の本誌は、昨年百三十周年を迎えた（現）お茶の水女子大学附属幼稚園を本拠とする「日本幼稚園協会」の機関誌として、日本の幼児教育の基盤を構築すべく、国内外の幼児教育・児童心理学などの理論や研究の紹介、現場からの実践報告、保育教材の提案などを盛んにおこない、一つの羅針盤たる役割を果たしていた。



戦後は、学校教育法と児童福祉法の制定によって、保育所と幼稚園の二分化がすすみ、倉橋らによる「幼保一元化」論争は保育界に重大なる問題意識形成をうながしたものの、それ以上のものとはなりえなかった。また、倉橋を中心に作成された「保育要領」（一九四八年）は、あくまでも家庭を保育の中心に据えたうえで、集団保育の位置づけを図るものであったが、高度成長期を経て、徐々に保育所・幼稚園の機能は特化され、家庭教育の後退はすすんでいった。

一九五四年から、『幼児の教育』の題字の脇にはいつも「家庭・保育所・幼稚園」のサブタイトルが記されるようになった。それは、倉橋から津守眞へ編集責任が移る際にも継承するようにと確認されていたことだという。しかし、ご覧のとおり、それを今号から「乳幼児の育ちと保育を考える」に改めた。僭越とのご批判もあるかもしれないが、今の子どもたちの保育状況を少しでもよいものにしていくため、本誌にできることを微力ながら追求していきたいと、本年から編集方針を一新から考えなおすトライアルに踏み出そうと思う。

平成十八年十月から施行の「認定こども園」も、サブタイトルの変更と無縁ではない。保育所・幼稚園のほかに第三の集団保育の形が一般化される時代になった。これは、就学前のすべての子どもの育つ権利を保障しようとする、一貫した「乳・幼児教育」構想のもとにかならずしもあるわけではない。少子化にとまなつ



て生じた保育所・幼稚園の運営状態の不安定化や、構造改革にともなう国家的な財政配分の変化などを背景にした緊急的措置という側面もある。大人側の論理が先行した幼保の一体化は、「家庭」を支援の対象とはしながら、その家庭における保育がいかなるものであるべきなのかというヴィジョンをもっているのかは疑問である。

本誌では、このような時代に、家庭とは何か、集団保育とは何か、を根本から考えていきたい。現代日本の大人社会がつくりあげた家庭、集団保育の質の変化と低下に対する危機感をバネとして討論しなければなるまい。「家庭」「保育」の概念を不問に付しては、現代に力を発揮する就学前教育を考えていくことはできないだろう。その際、「発達」や「教育」という強き概念を、「育ち」「保育」などのことばとの関係で、(否定するのではなく)再構成していくことが重要なのではないだろうか。

本誌は、従来から、すぐに役立つような保育雑誌を目指してはいない。ハウツー的な態度は、子どもを幸せにする保育からは遠いところであり、保育の質を低下させるからである。また保育のことを考えるためには、保育現場の中にいる人や、保育研究者の意見ももちろん重要だが、いろいろな側面から、人間とは何かについての問い“をもち、人間・子どもという存在へのそこはかとな興味をもつことが根源的に大切である。そこで、いろいろな分野の、一見、保育と関係のない領域の人



たちの専門的知見をも紹介していきたい。

以上のような編集方針は踏まえつつも、今年からは、読者層の拡大と、投稿しやすい雑誌をめざして、次のような編集方針を掲げる。まず、若い研究者の保育研究や、保育現場の素の保育記録などを取り上げて、保育的考察のなりたつプロセスを追うような記事を載せたい。また、現職保育者の考えること、行き詰る場面などについても、具体的に取り上げたいと思っている。保育所と幼稚園の関係が変わる中で、お茶の水女子大学では、「附属幼稚園―附属保育所―大学」の三者による、幼保を見通した保育・保育者養成カリキュラムの相互的生成をめざし、プロジェクト研究を開始した。その中間報告の連載も今月から始まる。本誌が、お茶大に限らず、いろいろな大学や保育現場における「中間報告」的研究発表の場になることができれば幸いである。論文・報告投稿に関して、そのご相談も含め、編集部へどんなアプローチしていただきたいと、心よりお願い申しあげる次第である。

最後に、今年の表紙絵について。一九九〇年第八十九巻以来、林健造先生に十七年ぶりの再登場をお願いした。ユーモラスで温かい先生のお人柄どおりの絵である。われわれの今年の試みが、新奇をねらったものではなく、林先生をはじめとする先達の方々の足跡をたしかめつつの奮闘であることを表したかったのである。

(お茶の水女子大学)